
Sweets Boy

矢沢零二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S w e e t s B o y

【Nコード】

N 0 6 0 2 Z

【作者名】

矢沢零二

【あらすじ】

天才スウィーツ職人・恩田翔太。一ヶ月前、彼はある事件に巻き込まれ右太もを刺されて入院していた。そんな彼の元に永作博美級の美人からウエディングケーキの依頼が入る。ドキドキワクワクのスウィーツハードボイルド物語。

1話 永作博美級の美人

「ウエディングケーキの依頼をされた」

マサキさんが言った。「昨夜のBタイムでな」

マサキさんは僕のお見舞いの品のハーゲンダッツ・ストロベリーを食べている。

この人はその前にメロンとシュークリームとあんドーナツと抹茶のロールケーキも食べていて、もちろんそれは全て僕だった。それを我が物顔で食べるこの男に幸福な明日が訪れるのなら、きっと神様なんていないと思うし、ましてや平等な人間社会の実現なんてありえないと本気で思った。この人を下痢でもがき苦しめやって下さいと心を込めて僕は祈った。仏様に。

「もちろんできると俺は即答した。彼女が永作博美級の美人だったからな」

マサキさんはなぜか偉ぶって言った。

「俺がやるんですか？」

僕は言った。

「永作博美級の美人はお前を指名してきた。お前のような奴をだ」

「俺を、ですか？」

「信じたくないが、事実だ。認めたくないがな」

「期限は？」

「結婚式は二月十四日、バレンタインデーだ。まあ少なくとも一ヶ月前だな。一月の中旬までに完璧な設計図が出来ればいい。どうだ恩田、やってみるか？」

「もちろん。やります」

僕は言った。

「よし。明後日だったな、お前の退院は」

「そうです」

「じゃあ明後日、その足で永作博美級の美人の家へ行っ来て来い。話は俺からしておく」

「一人でですか？」

「そうだ。怖いか？永作博美級の美人が？」

「だって、会ったこともない女の人の家にいきなり行くなんて、だいたい何を話せばいいかわかんないし、不安です」

「いいか、恩田。永作博美級の美人のことをもう十年付き合っている素晴らしき友達だと思うんだ。思い込むんだ。会ったこともないなんて二度と口にするな。お前はもう会っているんだ。十年前の夏、そう、湘南の海で、デートしたんだ、永作博美級の美人とお前は。そうだぜ、あの風は素晴らしかったぜ、メイビー」

「十年前って、俺、十歳ですよ」

「そのどこに問題があるんだ？俺の湘南デビューは五歳だ」

「マサキさんと同じレベルで考えないで下さいよ」

「うるせえ奴だなウジウジ男のくせに。まあ、とにかく行って来い。行けば何か起きるさ。とつても素晴らしいことがな」

マサキさんは言って、

その直後、うわああと叫び、お腹を押さえてサーッとそれこそ風のように消えていった。

しばらくすると遠くの方で看護師さんの怒声が聞こえた。

馬鹿だなああの男はと隣のベッドのおじいさんが言った。

お騒がせして申し訳ありません。僕は言った。

そして結局、その日にマサキさんの姿を見ることはなかった。違う部屋で入院しているのかもしれないと心配したけど、大丈夫だと思っただ。だ。

だって、ちゃんと仏様はいたのだから。

2話 バタークッキー

一ヶ月という入院期間は、僕にたくさん思い出を作ってくれた。僕はいつも思う。時間は料理人。時間は思い出という料理を作る究極の職人なんだって。僕はそれを盛り付けて整えて自分の経験という名の甘いスイーツに変えるんだ。

病院でたくさんの人たちと出会った。みんな体のどこかが不自由だった。両足がない人から右耳がない人、目が見えない人、色々な人たちがいた。けど、みんな優しくかった。担当の先生も看護師さんたちも。みんな。

僕はお世話になった全ての人たちに感謝の気持ちを込めてバタークッキーを焼いて配った。一人一人に。バターgebäck。ドイツ語でそう呼ばれるこのクッキーはドイツ菓子の基本中の基本だ。僕はもう一ヶ月も現場を離れていた。しかし七歳の時にはじめて作ったこのクッキーを作ること、それをお世話になった人に食べてもらうことで、それで思い出せた。僕はお菓子が大好きだ。どんなことよりも。本当にありがとう。僕は言って病院を出た。

マサキさんが送信してきた地図は寒気がするほど細かい指示で溢れていた。

三鷹駅で降りてパン屋に寄り、高田みゆきという女の子の接客を見つめること。声のトーン、瞬きのリズム、特にその部分をよく見ること。彼女の胸に見とれても許すということ。小金井公園行きのバスに乗り、着いたら降りて二回深呼吸をし、自動販売機でコーヒーを買い、近くのカソリンスタンドの店長とスタッフに差し入れてしっかりあいさつをすること。その店長が今回の依頼主の新郎であること。そして必ず、どのくらい新婦のことを愛しているのかを訊ねること。

「そういうわけで、どのくらい愛していますか？」
僕は言った。

「そういうわけって」
新郎さんは言った。

「君が俺たちのウエディングケーキを作ってくれるんだね」

「そうです。恩田翔太といいます。頑張りますんでよろしく願います」

「福沢です。こちらこそよろしくね。コーヒーをありがとう」
福沢さんは言って握手をしてきた。

「恩田くん。君のことはよく知っているよ。彼女が大ファンなんだ」

「僕のですか？」

「そうだよ。君のスイーツは誰も真似出来ない。とにかく愛でいっぱいだよ」

「はあ。正直そこまでないと思いますけど」

「仕事は結果が全てだよ。結果は受け止めなければならぬ。嫌でもね。俺はそう思うよ」

「仕事のこと、僕、あんまり記憶が残らないんです。気がついたら終わってて、自分が何を作ったのか覚えていないんです。いつも

「そうなんです」

「まるで俺が彼女という時みたいだね。彼女といると、すぐに時間が過ぎてしまふ。何を話していたのかもあんまり覚えていないんだ。それと似たようなものかもね」

「好きなんですね。奥さんのことが」

「まだ恋人だよ。君のウエディングケーキをカットするまではね」

「そうでしたね」

「そろそろ行った方がいいんじゃないか？彼女が待っていることだし」

「はい。ありがとうございました。なんか、福沢さんが、優しくして安心しました。では、失礼します」

「ああ。この道を真っ直ぐ、五分くらい行ったところが俺たちのマンションだ。ブルーの屋根だからすぐにわかると思うよ。彼女に今夜は早く帰るよって伝えてもらえるかな」

「わかりました。では」

僕は言つて、頭を下げ、真っ直ぐ歩きはじめた。

福沢さんはしばらくの間、車みたいに僕を見送ってくれた。

強い声で。でも優しい声。僕は少しホツとした。

3話 フルチンの下痢男

歩いていると、チャルメラの音が聞こえた。携帯が鳴っている。美藤さん。すぐに出た。喜んで。

「はい」

僕は言った。

「もう病院は出たの？」

美藤さんが言った。声が可愛い。仕込みが終わっている証拠だ。

「出ましたよ」

「マサキさんが心配してるわ。トイレで。彼女と会えたのか？って」

「トイレ？また下痢ですか？」

「そうよ。ドアを開けたままね。もはや彼の特技と言えるわ」

「病院のみんなにバタークッキーを焼いて配ってたんです」

「それでこの時間？もうすぐ十六時よ」

「一人一人に配ったんで」

「ちょっと待ってて、マサキさんにそう伝えるわ」

「マサキさんにかわってもらえますか？」

「それが出来るんだったら、私が電話をしてないわ。彼は両手が使えないの。殺すなら今ね」

「なるほど」

僕は言った。電話の向こうで美藤さんの大きな声とマサキさんのか細い声が聞こえる。

「逃げ出したのかと思った、と必死に下痢男は言っているわ。フルチンで」

「逃げてませよ。新郎さんと会って、もうマンションの前にいますって、もうすぐちゃんと会ってフルチン下痢男に伝えて下さい」

「手ぶらじゃないだろうな？って下痢男は悲痛に心配しているわ」

「クッキーを持っています」

「恩田くん、いったいクッキー何枚焼いたの？」

「四百枚ほど。昨日からずっと仕込んでたし、病院の厨房は大きかったから特に不便はありませんでした。栄養士のおばさんたちも手伝ってくれたし、仕事の勘も取り戻しましたよ。全てね」

「クッキー、私の分はあるの？」

「もちろん。下痢男の分もちゃんと」

「今夜はあなたの退院祝いよ。なんか食べたいのある？」

「いいですよ。そんな」

「私はあなたに助けられたわ。あなたは死ぬかもしれない。私
が何を考えているかわかるかしら？」

「美藤さんの笑顔だけで僕は十分です」

「ふうん。そんなこと言うようになったのかー、恩田くんも。わか
ったわ。勝手に作っとく。そうだ。彼女は美人らしいじゃない。永
作博美級の。あなたがちゃんと目を見て話せるか心配よ、私も」

「僕はいつも美藤さんと話しています。今もこうして。美人には慣
れています。それに美藤さん以上なんていませんよ」

「その台詞を言わせたかったの。気が付いた？」

「ええ」

「早く帰ってくるのよ」

「Bタイムがはじまるまでには」

「私はまた腕を上げたわ」

「僕は知識が増えています。たっぷりと」

「いい喧嘩が出来そうね」

「僕はあなたに勝ってしまうかもしれない」

「私は手加減が出来ない」

「僕も同様に」

「ゾクゾクするわ。じゃあね」

「では後ほど」

僕は言った。

目の前にブルー屋根のマンションがある。
見るからお金持ちが住むマンションだ。
心配なんてご無用だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0602z/>

Sweets Boy

2011年12月3日11時56分発行